

平成31年3月11日(月)

2011から8年の時が過ぎました。

2011年3月11日午後2時46分、私は福島県庁西庁舎9階の北の端の一角に座り、ちょうど椅子から立ち上がって歩きかけたときに地震が起きました。

はじめは高をくくっていた人も揺れが大きくあまりにも長く続くので、机の下に身を潜め、机の脚に手を添えていながら、揺れがどんどん大きくなり、机が回り始める中で、どうにもならない時間が続き、ロッカーや書棚が次々大きな音を立てながら倒れていきました。私は、2メートルの幅で右往左往しながら、テレビや書籍が空中を飛び交うのを眺めつつ、とんでもないことになったと実感が徐々に増していくのです。実際には3分くらいだったかと思いますが、長い長い時間を経験していく中、県内の学校は果たして大丈夫なのかと心配していました。

揺れがやんで、12階の食堂から煙が上がる中、真っ暗な階段を1階まで下り、もみじ山公園に避難したのです。外は雪が降り始めていました。

本当の苦しみはそれからでした。町はいたるところ崩れていましたが、被災者が困っている様子は表面にはなく、それでもアパートに帰るとすべての家財道具は倒れており、部屋のかたすみに布団をひいて、津波の状況を携帯のワンセグで見つめていると、課長から電話があり、明日から10万人が浜通りから中通りや会津地方に避難するのでその対策に朝から突入するとの連絡でした。

次の日、食べるものもないまま、県庁に行き、自治会館3階の対策本部に詰めていると、原発の爆発の情報が入り、さらに混迷を極める状態が夜まで続くのでした。

雪の中、濡れるままに自転車で帰った私は、きっと、その日の風に乗った放射線をかなり体に浴びながら帰宅したのだろうと今思います。

6月まで、何をどのようにしていたのかあまり記憶にありません。毎日、必ず、自治会館に詰めて、県内の学校の生徒の被災状況を文部科学省に報告する事務をするのが日課でした。

4月になると、桜の花が咲きました。福島一小の校庭の桜が、行きかう人々のマスクや自衛隊の迷彩服に隠れるようにして、それでも満開の桜の花が咲くのです。こんな時にも必ず花は咲くのだと心から思いました。

本日、○人死亡確認。○人不明。という数を積み上げる報告を各地の教育事務所から連絡を受け、どこのどの学校の数がどのように変わるのかを毎日確認していくことが、一日の仕事でありました。このことが、何の役に立つのかといつも自問自答する毎日でした。現地に飛ぶことが今大切ではないのかと焦りながら、現状をきちんと報告してどこに何があったのかを明確にすることは誰かがやらなければならないのだとも思っていました。ふつつつといつも怒りがこみ上げる毎日でした。

原町高校の体育館には、2000を超える遺体が収容され、その中の子ども姿を見て、教員が心を病むという報告や、インフルエンザで早退した教員が津波の犠牲にあったという報告が上がるたびに、その悲しみをどうすることもできず、自分の仕事が一人一人の心に届かぬ忌々しさに歯噛みする毎日だったのを覚えています。

いわきは大丈夫なのか、磐城高校の生徒は、大きな影響を受けていないのか、といつも心に思いながら、県内の状況をどのようにすれば前に進めることができるかについて、知恵を出し合う毎日でした。

4月3日に初めて、高速道を通して、いわきに向かいました。道路はところどころひび割れており、あちこち陥没したりしていましたが、いわきの町まで止まることなく行くことができました。制限速度は、50キロメートルでした。父と母が、実家で寝起きしており、水も知り合いが運んでくれ、食べ物には不自由していないということでした。海への道は行くことができませんでした。早々にトンボ帰りで福島に戻りましたが、4号国道などは、ずっと伏拝の坂のところまで不通が続いていました。

今、あの時の小学生2年生と3年生が、磐城高校に通っています。今年入学する生徒は、震災時に小学1年生であった児童たちです。それぞれ、大きな影響を受け、その事実を何とかして受け止め、打開の道を家族や地域で模索してきた私たちは仲間です。

今後の、本当の打開と解決には、あと何十年の月日を超えなくてはいけないのも事実です。

それでも、皆で前を向き、いわきを、磐城高校をつなげていきたいと心から思います。

力を結集しましょう。みなさん、是非にきつといわきに帰ってきてください。この磐城高校を皆の力でつなげていきましょう。心から願います。

卒業生の皆さん、在校生の皆さん、必ず磐城高校をつなげていきましょう。次の時代はあなたたちの出番ですよ。「我ら」の心は、永遠なのです。